

太古の成り立ち（花崗岩が隆起した島） ～縄文時代からの人の暮らし

Yakushima's Geological Roots and Early Human Life



大地の時間が生んだ、 屋久島の“かたち”

屋久島は、今からおよそ1,550万年前、地下深くにあったマグマがゆっくり冷えて固まった「花崗岩（かこうがん）」のかたまりが、少しずつ地上に顔を出してできた島です。つまり、火山の噴火で生まれたのではなく、地球の“押し上げる力”によってできた、ちょっと特別な島なんです。

中央部には、九州で一番高い「宮之浦岳（みやのうらだけ・1,936m）」をはじめとする高い山々が連なり、まるで島全体が岩のかたまりのよう。実際に、屋久島には平らな土地がとても少なく、山の斜面や溪谷が多いのが特徴です。特に、島の南部にある「千尋の滝（せんびろのたき）」は、巨大な一枚岩を豪快に

流れ落ちる滝で、花崗岩の大地がむき出しになった様子を目の当たりにできるスポット。ここでは、何万年、何百万年とかけて形づくられた、島の“地球の時間”を感じることができます。

この“硬くて風化しやすい”花崗岩のおかげで、屋久島では深い谷や豊かな森、透きとおった川など、独特の自然風景が生まれました。大地の成り立ちを知ることで、屋久島の自然の奥深さが、きっともっと面白く見えてくるはず。また、屋久島の安房川では、リバーカヤックを楽しみながら、花崗岩が長い年月をかけて侵食されてできた美しい溪谷や奇岩の景観を間近に体感できます。川面から眺める自然は格別で、静かな流れの中で島の成り立ちを感じることができる、おすすめのアクティビティです。



千尋の滝



安房川カヤック



横峯遺跡

人が暮らしはじめたころ

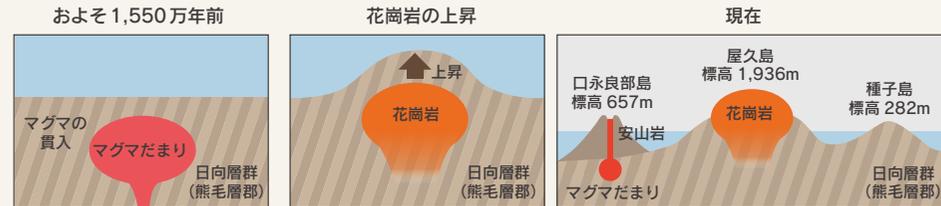
自然とともに生きた、むかしの人びと

屋久島に人が暮らし始めた時期は、はっきりとは分かりませんが、少なくとも1万数千年前には既に人が生活していたと考えられています。ですが約7,300年前、鬼界カルデラの大噴火があり、一度人々の営みは途絶えることとなります。その後、再び人の暮らしの痕跡が現れるのは、約6,000年前の松山遺跡からです。さらに、約4,000年前から600年ほど栄えた横峯遺跡では、当時の暮らしを特徴づける石器が数多く出土しており、木の実を食べるための磨石や石皿、木を伐るための石斧など、照葉樹林の恵みとともに生きていた屋久島縄文人の姿が想像できます。町の歴史民俗資料館では、こうした太古の暮らしぶりを伝える展示を見ることができます。自然と結びついた暮らしの知恵や感覚を、今に伝えてくれる場もあります。自然とともに生きるという感覚。それは、今の私たちにも響く、屋久島の大切な文化なのかもしれません。

屋久島をのみこんだ 大噴火

九州を覆った火山の記憶

約7,300年前、屋久島の北西にある鬼界カルデラで起きた大噴火は、日本の歴史の中でも最大級といわれています。火山灰はなんと東北地方まで届き、屋久島は厚い火山灰や火砕流に覆われました。そのため、しばらく人が住めない「無人の時代」があったと考えられています。いま島を歩くと見える豊かな森や遺跡の下には、その大噴火の痕跡が眠っています。自然の力の大きさと、人々が再びここで暮らし始めた歴史を感じてみてください。



約1,550万年前、地下深くにマグマが入り込み、冷えて花崗岩となりました。その花崗岩が押し上げられ、現在の屋久島の高い山々が形づくられました。図は、その変化の流れを3つの時代で示しています。

いのちの島のはじまり

生命を迎え入れた島のものがたり

海底から隆起した花崗岩は、やがて風雨にさらされて砕け、砂となり、繰り返される周囲の火山活動で降り積もった火山灰と混ざり合っ、土壌が少しずつ形成されていきました。その土の上に、海流や渡り鳥によって運ばれてきた種子が芽吹き、

微生物や昆虫、小動物たちが加わることで食物連鎖が生まれ、多様な生態系が形づくられていきます。

約1万年前まで続いた氷河期には、屋久島は種子島とともに九州と地続きとなっており、さまざまな動植物が島へと渡ってきたと考えられています。その後、氷河期の終わりとともに島は再び海に囲まれ、取り残された動植物は独自の進化を遂げ、ヤクシカをはじめとする固有種や亜種が誕生しました。



屋久島の歴史と人々の暮らしを学ぶ

屋久島町歴史民俗資料館 [MAP P13 ㊤]

縄文時代から現代まで、屋久島の歩みと人々の暮らしを、土器や農具、漁船などの実物資料とパネル展示でたどります。口永良部島より移築・復元した網代小屋など、島の生活文化を体感できる展示も見どころです。

[所在地] 屋久島町宮之浦 1593 [営業時間] 9:00～17:00
[休館日] 月曜、年末年始 [電話] 0997-42-1900

屋久杉と林業の文化遺産

Yakusugi and Forestry Cultural Heritage



屋久杉の伐採と保護

木と共にある島の暮らし

屋久島に広がる深い森。その主役ともいえる屋久杉は、島の標高500m以上の山地に自生する樹齢1,000年以上の杉を指します。栄養分が乏しい花崗岩の山地で、非常にゆっくりと成長するため、木目は緻密で、樹脂を多く含み腐りにくいという特徴があります。

山の奥に育つ屋久杉は古くから信仰の対象とされ、容易に伐ることはありませんでした。しかし、安土桃山時代になり、島津氏が勢力を強めると、建築用途を目的として屋久杉の伐採が始まります。その後、島津氏は屋久杉を重要な資源と位置づけ、

江戸時代初期には屋久杉を“年貢”として制度化しました。こうした伐採は幕末まで続き、結果として、5~7割もの屋久杉が失われたと推定されています。

屋久島で山仕事に従事する人を指す「山師(やまし)」と呼ばれる人びとが森に入り、伐採から搬出までの仕事を担っていました。明治以降、伐採事業は国の管理下となり、大正時代には森林軌道も敷かれ、伐った杉が鉄道で運ばれるようになりました。いまでは伐採は終了し、屋久杉は再び大切に守られる存在に。けれど、森の奥には今も、当時の線路跡や山師たちの暮らしの痕跡が静かに残っています。自然を活かしながら共に生きてきた人びとの営み——それも、屋久島の大切な文化です。

屋久杉とともに生きた山師たちの記憶

伐採された屋久杉や薪炭材を港まで運ぶための森林軌道は、安房・宮之浦・永田・栗生の4か所に敷設されました。また森林軌道沿いには拠点となる林業集落がつくれ、職員や山師とその家族などが暮らしていました。特に安房川の上流の小杉谷一帯(小杉谷・石塚集落)には、小中学校をはじめ、郵便局や床屋、商店などもあり、最盛期には500人を優に超える住人が生活していたと言われています。

伐採する木材の減少に伴い、いずれの集落も昭和40年代までには閉鎖されましたが、当時の建物や軌道の跡などの遺構は現在も残っており、森とともに歩んだ山師たちの営みを今に伝えています。小杉谷集落の跡は縄文杉へ向かうトロッコ道の途中にあり、小中学校の校庭跡や記念碑があります。また4つの森林軌道のうち安房森林軌道は日本で唯一現役の森林鉄道として、今も水力発電所の管理などで利用されています。

これらの屋久島林業史を物語る「屋久島の林業集落跡及び森林軌道跡」と「旧鹿尻島貯木場：屋久杉等海上輸送施設遺構」は、(一社)日本森林学会により「林業遺産」として認定されています。



屋久杉自然館

屋久杉を知ることは、屋久島の森を知ること。

屋久杉自然館 [MAP P15◎]

屋久杉自然館は、屋久島の森を訪れる前にぜひ立ち寄りたい、屋久杉をテーマにした博物館です。屋久杉と伐採の歴史、人々との関わり、土埋木と工芸まで、模型やジオラマ、CG、パネル展示でわかりやすく紹介しています。

[所在地] 屋久島町安房2739-343
[営業時間] 9:00~17:00(最終入館は16:30)
[休館日] 第一火曜、年末年始(12/29~1/1)
[電話] 0997-46-3113

写真提供 (P6掲載の古写真4点)：屋久島森林生態系保全センター



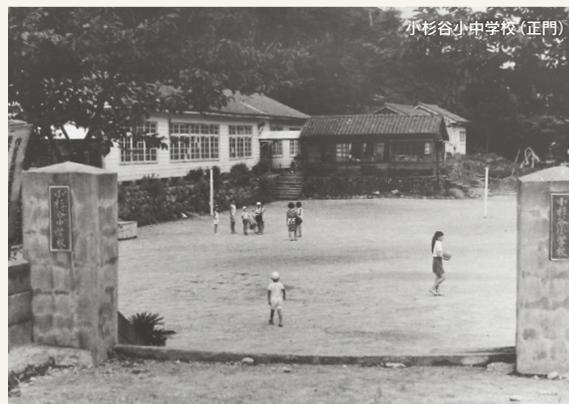
小杉谷製品事業所跡にある記念碑



平木を使った宿舎(小杉谷)



屋久杉の集材(昭和20年代)



小杉谷小中学校(正門)



小杉谷の風景